

7. SIBAGAKI 戦隊 SIBA レンジャー

各務原市立那加第三小学校

6年 戸谷 円香 前田 樹 佐守 愛華
柴垣 明里 長尾 ひろみ



敦賀市立沓見小学校

6年 高木 果穂 松本 美憂 奥井 理澄
前田 朱里

これは、悪と戦う正義の味方『SIBAGAKI 戦隊 SIBA レンジャー』の物語だ。

ナンバー1 女の子をカンタンに口説く……その名もリョー！

ナンバー2 笑いを取るために日々、修行をつんでいる、その名もフミヤ！

ナンバー3 シケの大魔王、その名もハジメ！

ナンバー4 自しょうイケメンの男、その名もカイト！

ナンバー5 男にモテる、SIBAGAKI 戦隊☆SIBA レンジャーのリーダー美少女、その名もユーリ！

なんとこいつら、平均年齢十五才の兄弟なのダ。ただ今、作戦会議中！ 今、最大の敵は……。

「みんな、聞いて。今私たちの最大の敵は、ネムケだっっ」

ねむそうな顔でユーリが言った。みんなは、それぞれ意見を言った。

「顔をつねればイイと思います。……っあ、ダメだ。オレの顔が変になってしまう……」

「手をたたけばイイと思います」

「よしっ。みんなで歌おうっ。きーみーがーよーはーー ちーよーにーーやーちーよーに」

「うるせっっ」

「余計ねむくなるっつーの！」

「ねむろーよー。みんなぁ……」

そしてついにユーリがブチ切れたっ。

「デメーら。ふざけんなぁ。もう目が覚めた」

まあ良かったではないか。

「よくねえよっ」

えっ、そうスカ！？ そうなんスカ！？

「オレらより作者のが不真面目じゃん」

「こんな作者、いやだぁぁぁあっ」

「オレたち……フッ……殺されるかもな」

おいおいおい男意おい老い。ちょっと待てー。

まずカイト。『フッ』てなんだよ。『フッ』て。イケメンじゃ無いクセに、カッコつけ

んなー。お前ら悪に殺されたいのかーっ!? あっ!?

「やっば、オレら……フッ……殺されんのか」

『フッ』てなんだあ、カイトおっ。他のヤツらは殺さんが、お前だけ殺してやるーっ。

「もう作者出てくんない……。ウザイ」

はうっ。今キズついたよ。作者キズついたよ、今。心のキズを負ったよ。

「……」

もういいもん。出て来ないよ。どーなっても知らないよ。ベーッだ。

「やっといなくなつた。スッキリだなっ」

「じゃあ、本題に行く。最近、岩田のおじいちゃんの自転車が盗まれた。かわいそーに。色は銀。小っちゃい。探せーっ」

「オーッ」

ダダダダダダ……………。

……………ダダダダダダ。キィィ。

「おいっ。オレらは悪と戦うんだろ。何で、自転車探しなんか」

「そうそう。特にオレは、カッコよく決めるんだぜ」

「どんだけナルシなんだよっ」

「本当のコトを言ってるだけだろ？」

「まあ。それはおいといて」

「オレもナルシだぜ」

しーん……。

「その話、終わりましたけど、ハジメさん」

「何でひく?? 何でキョリをおく?? そんなにキョリおきたいか、オレとっ」

「……はい。ハジメさん」

「よしっ。話変えよう。スッゲー戻るけど、オレは何でシケの大魔王なんだ……!？」

「えっ? シケるからですよ。あと顔黒いし」

(ハジメは、すごくはだが黒いのがあった……)

「確かにシケるけど、……黒いって言うなよ。あーとーキョリおかないで。全員で。さみしすぎる……。ねっ、お願いっ」

ピーピーピピピピピピピピピーピー。

「何で、嵐なんだ」

え?? 作者が嵐好きだからに決まってんじゃん。

「それより今の曲は何だ??」

「だーかーらー。嵐の新曲じゃーん!! 知んないの?? 分かんないの?? マジ?? ダッサー??」

ブチッ!

ひいひいひい。し……指令です。本部からの指令です。えっと、もうすぐ、アナウンスが……。

ただ今、悪の組織リーガンが動き出したとの情報です。ただちに倒して来て下さい。これは本部からの命令です。死んでもおそう式はやりません。死なないで下さいネ。またリーガンは、バクダンを使用しているとの情報。お気を付けて下さい。

……ブチ。

「切れた」

「分かったな。準備しろっ」

「オーッ」

ガクガクガクガクガクガクガクガク……。

「カイトどうしたんだ。ふるえてるぞっ」

「いっ、いやガクガクし、してません……」

「けーごだし。おかしいぞコイツ」

「大丈夫だって。いくぞっ」

「そうそう。大丈夫ー夫」

五人は光の中へ歩いて行ったのだった……。★

「でも、リーガンのアジトってどこ？」

「あてもなく、探せねーよな」

ヒントは『三』だー。わかるっかなー。

……にらまないで下さい……三丁目の杉山さんちの裏庭です！

「……」

「となりの家じゃん！？」

「来てしまった……」

今、ユーリたちは杉山さんちの裏庭に勝手に入っているのだ。

「よし。とりあえず探すか」

「でも、何も無いよな」

「あーっ！ あれ！」

フミヤが指さした方向には、自転車がかった。

「岩田のおじいちゃんのじゃん！」

「どうして杉山さんちに……？」

と、ここで本部からの追伸です。えーと、リーガンはちっちゃい銀色の自転車にバクダンを一つ仕組んだそうです。気をつけて下さいーい。

「ということは……岩田さんの自転車がバクダン？」

「おわっ！ どうしよう。どうしよう。早くしないとバクダンがバクハツしちゃうー」

「それじゃあ、やりますか」

「何を？ 何をですか？」

「バクダンの解除をするんだ」

「カイトそんなこともできるの！ すごいねー。で、どうするの？」

「え、俺じゃないよ。作者がやるんだよ！」

「えーと、意味がわかんない。あー。あと十秒でバクハツする」

「えー。どうしよう」

十・九・八・七・六・五・四・三（もうだめだ……）二（ああ、神様、お助け下さい）
一・バクハツ！

「あれ？ 家族が出てきたぞ」

「あー。リーガン。火薬じゃなく家薬を入れたな」

ガクッ！

「あ！ あれ見て。空に言葉が！」

本部からの通信です。リーガンのアジトが発見されました。なお、内部の地図はケータイで。

「やったな」

「階段もでてきてるから地下ね」

「じゃ。行きますか」

「オー！」

そうして、五人はリーガンのアジトへ向かった。

「おー。ここがアジトか……地下に家？」

「内部の地図を見ますか」

「敵の近くなので、がんばれ！」

「いっ、いきなりっすか」

「というか家こんなところにある」

「……それもう言いました」

「そんなに俺がきらいか？ きらいなのかー」

「それより、あの家行ってみよう」

「リーガンが一番目かな」

ちょいちょい作者が言うのもなんだけどさあ、男が最初に行けよ。ハジメさんを推薦しまーす。

「さんせい」

「賛成」

「賛せい」

「さん成」

きまりだよ。さっさと行って。

「はいはい、行きますよ。行けばいいんでしょ」

タタタタタ……ドン。

「ハジメー！」

「これは、ハリボテだ！」

ここで本部からの連絡です。また、そこの石にバクダンを仕込んだそうです。気をつけて下さい。

「……って、また。えー！」

「は、はやく探さないと」

「あっバット、石見つけたら投げろ！ 打ってやる」

「うおおおおお」

「？ あったー」

「投げるぞー」

「おうよ」

カキーン。ポッカーン。

「よっしゃ」

連絡です。リーガンが見つかりました。

「よしっ。さっそくリーガンの所に行くぞ」

その瞬間、「きゃー」と声が聞こえました。連絡です。今、リーガンにユーリがさらわれました。直ちに助けて下さい。

「早くユーリを助けに行くぞ」

リーガンは一番奥の部屋にひそんでいるとの情報です。部屋に行くとユーリが縄で縛られていました。

「ユーリを助けたければ、この俺を倒すんだ」

「よしっ。いつでもこい」

リーガンはバクダン、みんなは用意されていた銃で戦います。

「早くかつきるんだな！」

「ユーリのためにがんばるんだ」

「なかなかしぶといな」

「今だ」

みんなでいっせいに打ち出した。リーガンは、ものすごいダメージをうけてもうよろよろだ。

「もうひとふんばりでリーガンを倒せる」

がんばれ！ みんな。みんなはいっせいにリーガンを打った。

「アァァー」

リーガンはその場に倒れた。

「ヤッター！ リーガンを倒したぞ」

みんなで喜んでいる瞬間に、リーガンはまた立ち上がり、バクダンを投げてきた。

「ええー、何で生きてんのー？ さっき、俺らが倒したよなァー。えー」

「うるせっ。まずは、リーガンを倒してユーリを救う方が先だろ！ それから言えよ」

「わかった。まずは、リーガンを倒してユーリを救うのが先だな」

四人は、リーガンに銃を向け、何発も何発も撃った。みんなの気持ちは、ユーリを救うことだけだった。

そしてついに、リーガンを倒した。休むことなくユーリのいる部屋に向かった。みんなは傷だらけの体になりながらも、ユーリに早く会いたいという気持ちでユーリのもとに走って行った。